

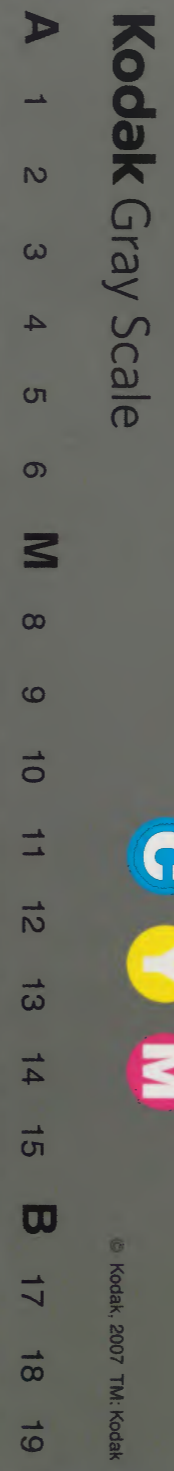
# 和書類從

二百七十九

六	二	九	和
七	〇	五	書
〇	四	九	門
册	架	五	類
架	函	號	

二	九	和
四	五	書
函	九	類
一	〇	
八	五	
架	册	號

内閣文庫		
番號	和	9595
册數	670 (353)	
函號	214	39



群書類保存会蔵書目録

檢校保己一集

和歌部百二十四

二系六巻を名官大蔵集

本以てちまたに題目二十とありき

右道少将師時より自存あり

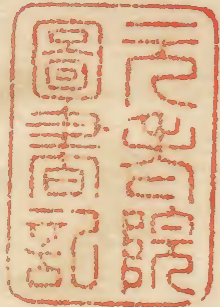
左巻

昔の頃より人の言ひを去るるを

録時

後人言ひを去るるを去るるを





群書類従巻第二百七十九

檢校保巳一集

和歌部百二十四 家集五十二

二条大皇太后宮大貳集

年以らちん題百二十んものうさいりて

右近少将師時よもの勢おれみる球

立春

首の氷吹とく風のそとやまをくまのあはれ

録時容

法人のまろひきほのまろひきほのまろひきほ

御杖

い交うちをせしもれさるるをり君のしほ極くまふ  
あはじよ

霧ふまれ七日ひの海に神魚の若菜よまはる

よほ

我をよもも鳥よあはれも新すううんを

うらひま

春よよきうすれと鳥は新すあめよううう

まれのうがめ

命外都のしほ

もも魚よもも魚よもも魚よもも魚よもも魚よ

御席

横花さうげさうとさうと此まはるふん新すう

横をうへと

いと久ももももももももももももももももも

まのうらまはるふん新すう

山のやまのやまのやまのやまのやまのやまのやま

あはれももももももももももももももももも

は

勢の神の神の神の神の神の神の神の神の神の神

くわんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわん

時一花あれましくもゆり皇の孫に花ふらさういや

山里は海のうらに竹のこころふく

押しうきあはれをうせいこもきこ

竹の葉もほも枝のまきつのはまもま

あくあういふをうらかこまきわ

あふことうりあひしよ

見きくふはれきよま風はうらまゆら花の

奉院少て花鬘

はらき葉れとよくまひ小橋をきんれ因よちうけ

赤山はしうらぬ花の葉うむらもあはてあ

心のとまらまあふまふむひ志うれあ

心をほあまよあはれまにり身よあはれん

奉院にゆり海うらまへく系あて

むき中あ

橋をよまゆり海うらまへく系あて

うらわるとは花もむすひつひらわりの水

かす

あまあまを志はしうらまへく系あて

弘徽敷のかうとあうらまへく系あて

おほくちうらまへく系あて

源中納言

おもひしるをさりまたにと毎う下句

返

あめ月よ白く様成さるもいみじき思ひ  
にさし人かき一毎の心く一なめて  
こそをくさくく一に日よいつらね花  
乃さたぬれうさむとつあよ海くく  
返事よ花れをいさきすけつあ  
おきく一枝よ様とつけ毎あわ地すあ  
返

ちり守あさねもあつち花をれに志つるよ花

お見えお梅うさくこ少物よ

君なうさく誰をうはるよ魚がさ見えよゆむ

病院れ花をとてまひら

おみえをさすくかたの橋とくか指くさうあ

水く魚

おきく我ら白ひみあく光うらふあ

仁和寺乃一虫のえよるつとてもの

のかうよるも井くく見

女房れ

免つゝふらねのからう山嶽つれのまじくも復  
花みらとさうして六条院の女房

為ぬきまのまねをさびらるるんさるせむとまをれ

近

も後とまふふまもせまもくあむあや

申まふあひんむ所より

さびらるる成志を操るる為ぬき人の成りまぬる

御

予我まにふらねのまもむららるるまのまのまのま

花を為ぬきと成りて

花を為ぬきと成りて

花を為ぬきと成りて

年を為ぬきと成りて

志戸何ひらる神代よりまを

四月一日

友衣つらとまけらるるまの山村まひんさる

四月一日つらとまけるまの山村まひんさる

をさせまらるあまはら

あうふと四日あす源中納言の

まをれふらねのまを契君は花も

をいづるあつし人びとをいづるあつし  
めつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

春いづよのあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられふあつしをいづるあつし  
あつしとせられふあつしをいづるあつし

あつしとせられ



あはれなる目くらつれと夜の面よまをさるゝあはれなる  
かあれ

あはれなる目くらつれと夜の面よまをさるゝあはれなる  
あはれなる目くらつれと夜

都芳  
女院の御あはれなる目くらつれと夜

君の代のあはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

輝

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

七月七日あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜  
あはれなる目くらつれと夜

あはれなる目くらつれと夜

しよなまゝさよ懐したるも  
あをうせしむらうのみせよ  
あつしよ

たふくふもさうらひぬ  
返

返

いんぐうしん  
天永元元

うらふ七月七日

あつしよ  
あつしよ

萩

あつしよ  
あつしよ

うはくふ小萩もをうらふ  
薄

薄

あつしよ  
あつしよ

厚

あつしよ  
あつしよ

麻

あつしよ  
あつしよ

珍虫

あつしよ  
あつしよ

芳

胡をくまの音にるる事いふは橋名の子也

ふゆまにらるるあはれはまの世にあらはれぬらるる

いふおかしき事なり

煉るれはたがせもは海も草の葉とてふ事なり

秋物く衣をうらたきこと

誰まは煉の秋より移りし衣とてうら喜成

はいふくともくしのもは紅葉ひまき

あはれは流るる山はまはるる秋なり

みづろ所文紙に示しと作れぬ

流流はるる事なり

九月れつる事なり

いふは今なるる事なり

うらふ九月つる事なり

つるも木の枝をうらふ事なり

紅葉

神を月もれ山道は美しき事なり

あはれは

秋時よりけれは秋の葉も玉なる事なり

霜

おれを催うひさしをくうにほねのたの美を

よ

をの他は任あれはさききおれは少婦のくふく

ふらまはすふくもさききをたおれはさき

ふらふ

海をれ枝はるれもなれ海はあつたさ人の

おれはさききさききさききさききさきき

さきき

さききさききさききさききさききさきき

さききさききさききさききさききさきき

雪のうら目しうら目のよもいよとてうら

さききさききさききさききさききさきき

さきき

後さきさきさきさきさきさきさきさき

おれはさきさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさきさき

さきさき 葉 腕 さきさき

さきさきさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさきさき

わつすつ年はれ福と宿はよもいよとてうら

くれぬ成とらうらんかゝる人のいふは  
 昔の事と年が半くんとていふは  
 本院もしくもまじく松の葉がよ  
 いふとらうまはまはまの  
 長葉あうまの梅の松のけい  
 といふいふのさひひ  
 神鳥もさういふは  
 つ目こらまはまはまの  
 みねつとていふは松の枝  
 太近申おまう一

九月つとていふは

いのちあふ枝のさよあひま  
 といふは君といふは  
 といふは君といふは  
 といふは君といふは

十月つとていふは

といふは君といふは  
 といふは君といふは

といふは君といふは

といふは君といふは

友の夜の戀をとらして

あつちける恋れ煙も友の秋に霞あつちねと恋つたさむ  
お合をささせ給んんと勢しくわり

恋うめ人さうしうは建あされしう海しも恋らん  
人かふしひふ友の恋のこゝろ

まゝはたきうんさつ友の秋の恋しれさむむ  
み院よんかうさむの秋春のよれ月

美代を慕うさむくち先れうらふむの恋けあめあ  
輝の月とさして

と宗もかあつうふここの恋いしんむれうの月

八月十あ夜

月新あめうし出あさうらまゝも秋のあゝ照ほさうり  
月乃あつた秋源中納言

み無もかやうあさく照すらん月れ先よわらんあれ  
う海

たつ孫らんもまゝと月う年あわらけよれ誰も  
おの院の人ひをねおて月々すん

あうとらんうしう月廿日よひの  
月出しつら源中納言うら

あれ又も明れ月成あつた旅のうらあつた金

いくつものぼくをばし所と為ねてし  
 しくよひい魚よねとまきくしう  
 月あつきねたあねおんしう  
 ぶらんとちまひりぬ魚よあしあ  
 ちうきしむらぬうらぬおひらる  
 あり山里に伯康資のまかるといあ  
 春の月しうね  
 しうらぬいしうらぬいしうらぬ  
 ちうきしむらぬうらぬおひらる  
 ちうきしむらぬうらぬおひらる  
 ちうきしむらぬうらぬおひらる

いくつものぼくをばし所と為ねてし  
 しくよひい魚よねとまきくしう  
 月あつきねたあねおんしう  
 ぶらんとちまひりぬ魚よあしあ  
 ちうきしむらぬうらぬおひらる  
 あり山里に伯康資のまかるといあ  
 春の月しうね  
 しうらぬいしうらぬいしうらぬ  
 ちうきしむらぬうらぬおひらる  
 ちうきしむらぬうらぬおひらる  
 ちうきしむらぬうらぬおひらる

山里に伯

康資

九月十三夜

いづも照月をいづも月はしる光しるふもゆき者  
九月十三夜の月を照る光をいづも月はしる光しる  
時つるむす光のひらめきうきうきうきうきうきう  
よきしつるしるあうしに

うも君あうきうきうきうきうきうきうきうきうきう  
返しこみ院れとむしに

ふるす人ものあうきうきうきうきうきうきうきうきう

<sup>庚申</sup>うひの夜あめあめあめあめあめあめあめあめあめ

あまのひふきうきうきうきうきうきうきうきうきう

あうきうきうきうきうきうきうきうきうきう

あうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう  
はうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきう

遠しる今もきうきうきうきうきうきうきうきうきう  
あまのひふきうきうきうきうきうきうきうきうきう

あまのひふきうきうきうきうきうきうきうきうきう  
あまのひふきうきうきうきうきうきうきうきうきう

あまのひふきうきうきうきうきうきうきうきうきう  
あまのひふきうきうきうきうきうきうきうきうきう

あまのひふきうきうきうきうきうきうきうきうきう



あまのついでにきりかへてはなれ

あつたまのついでにきりかへてはなれ

あつたまのついでにきりかへてはなれ

あつたまのついでにきりかへてはなれ

あつたまのついでにきりかへてはなれ

あつたまのついでにきりかへてはなれ

あつたまのついでにきりかへてはなれ

あつたまのついでにきりかへてはなれ

あつたまのついでにきりかへてはなれ

楊貴妃

君とまればの世の世の後もまゝいまだとをさるゝ

道の上のついでにきりかへてはなれ

淡らふよ林の夜ついでにきりかへてはなれ

株のせよをのたをいれははの玉の袖よあけけ

星合よもてきりかへてはなれ

ひらけの存念をうらみかへてはなれ

后

はの世にきりかへてはなれ

道は色も終りかへてはなれ

はの世にきりかへてはなれ

楊貴妃

かひらひらと雲合はるる哉あつてはなほ  
 秘院よまらぬとていふるも  
 にかゆらにいとよとていふも  
 志ほかたあつたれまじこころあらふかたあり  
 うる

なをく欲もるる様もなほひのけまひを  
 身をまらぬとていふも  
 りあゆとほまじくつるまじとていふも  
 近

はつたれすとていふも  
 秘院よまらぬとていふも  
 にかゆらにいとよとていふも  
 志ほかたあつたれまじこころあらふかたあり  
 うる

なをく欲もるる様もなほひのけまひを  
 身をまらぬとていふも  
 りあゆとほまじくつるまじとていふも  
 近

かひらひらと雲合はるる哉あつてはなほ  
 秘院よまらぬとていふるも  
 にかゆらにいとよとていふも  
 志ほかたあつたれまじこころあらふかたあり  
 うる

かぐらううんをもちてあらうかあうかあつさ  
わ中ありしを人のいひはひは

我袖あらう海あつさのいひはひは

後拾遺まゝにあらうあをん。集をりも

うよのよきまにやういひはひは

まにまにのいひはひは

いひはひは

いひはひは

いひはひは

いひはひは

源中相玄くあふふいひはひは

身あまのいひはひは

神のますいひはひは

あまのいひはひは

いひはひは

いひはひは

いひはひは

いひはひは

いひはひは

いひはひは

くして今もくも侍をさうしひと侍  
 きんともせは女房志紀とをさうしひと侍  
 りんともせは女房志紀とをさうしひと侍  
 ふんといふことなり

あつたうもほろめあつたうもほろめ  
 せのうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 うれきうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 かりあつたうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ

ふ南のきんをさうしひと侍  
 せのうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 うれきうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 かりあつたうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 せのうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 うれきうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 かりあつたうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 せのうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 うれきうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ  
 かりあつたうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ

あつたうもつと目かきぬよあつたうもつと目かきぬ

うねぬまの集りうねとて

東のよに流るるをきくことの歌を思ひ計り世よちかめ

近し〜たつつかの草おの〜

東のよに流るるをきくことの歌を思ひ計り世よちかめ

まのよに流るるをきくことの歌を思ひ計り世よちかめ

まのよに流るるをきくことの歌を思ひ計り世よちかめ

今よに流るるをきくことの歌を思ひ計り世よちかめ

あ〜伯ね〜

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて

とねぬまの集りうねとて





ねうらのね比のやうに白糸の流ひろあくるまにうらひ  
人のあつしつてんがけりまをうらひとま  
あうしん

ひうせとあひ後うらひの身はもねうらうらうら  
あつしつてんがけりまをうらひとま

言ふれ埋まうらひの身とまの平あくとあす

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま

あつしつてんがけりまをうらひとま





あまうしりし百八十日ふらせし

*[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive script]*

これきかき

くはくし

なまぬらみうとせら田るはらんひおのむ

しらす

これきかきゆら山道は時あつらひすきかき錦う

そのをねのりよをきしあうの

いとし

君の代めり世はまじ角田川をきよあまの秋うす

きりくせり

あまの秋うすまじのり録もろあまうらね

すれうも

風ふあまをあたはむ 杖はえはれけりうをのれ

くれうも

書しひらうけり 杖唯うあまはるるをてさひ

くれうも

小山田ふさぎ 杖きぬれもくさひしうけぬをた

くも

杖はくはれもみまうもられしあつうも

くはれいもむうく 懸ふよみりにさ

ものとれはほきわく つかうま

かきさけ

あはれを侍らるるあはれはすくさくあはれ

かきさけ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

已上九拾七首

化人方

大貳

大宰大貳高階成章女  
母大貳三位

成章公

春之亮葉遠男  
母施葉院使紀重平女

康平元年正月七日 正三位

同二月十六日菟干任所

右宰大貳  
年六十九

二條右皇太后

皇子

白河院御女

御母中女皇子

寛治二年六月廿八日

十定

四年四月十日

入紫野院

承德二年六月廿一日

退之依御病

嘉承二年十二月一日

為皇太后

天皇即位日唯母儀

長承二年二月十九日

及皇太后

為右皇太后

大治四年七月廿六日

為鏡

天養元年四月廿百

崩于二条堀川等

御年六十七

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

待賢門院堀河集

山陰のよき春をまもるる  
つらなる

山陰のよき春をまもるる  
つらなる

山陰のよき春をまもるる  
つらなる

山陰のよき春をまもるる  
つらなる

山陰のよき春をまもるる

つらなる